

巻頭言

豊川市民病院
伊藤 淳

理学療法の質

近年、理学療法士養成校の大幅な増加により、学校間格差や個人格差が生じ、理学療法の質の低下が危惧されて久しくなります。教育現場・実習施設でも学生の学力低下やコミュニケーションスキルの不足を指摘する声をよく耳にします。

現在、愛知県士会の会員数は5000人を超えました。この会員増加とともに理学療法の社会的認知度は向上し、期待される役割も施設内から生活の場へ、治療に加え予防へと拡大し、社会的責任は大きくなっています。しかしこの急速な会員増加ほど社会が期待する理学療法や、患者への治療の質が向上しているのか疑問に感じています。

以下、介護保険下で理学療法を実施している脳梗塞片麻痺患者さんが、別疾患で当院に入院した時にお話しになった内容です。「歩行訓練をしていますが、リハビリの先生は“足を上げて、顔を上げて、背中を伸ばして”といつも言われます。でもできない。なぜできないのかを教えてほしい、どうすれば足が上がり、良い姿勢で歩けるのか？聞いても力がないからと言われるだけ。もう3年経ちました…」

日本理学療法士協会の半田会長が「なんちゃってリハビリテーション」としてPTの質の低下を危惧されているように、理学療法士の将来に大きな不安を感じました。

今の臨床現場は、患者治療とともに種々の事務書類作成が義務付けられています。患者と向き合える時間も少ないかもしれません。他職種連携のもと、時には専門的な内容よりも誰にもわかる表現・記載が求められます。しかし不十分な評価のもと、個人に対応しない目標設定で、効果検証を怠り、患者の訴えを傾聴しない、単調で時間だけを費やす治療であってはならないと感じます。我々は「運動のお兄さん・お姉さん」ではありません。専門家として動作観察から分析し、予測・仮説を立てて治療を行い効果検証するという、この医療現場でも特殊な能力は、理学療法士の根幹であり不可欠な能力だと考えます。

地域包括ケアシステムや、病院再編。いま我々を取り巻く環境は大きく変わろうとしています。公益法人となった県士会には、地域住民や行政からの期待も大きくなります。個人の質の向上が地域住民の期待に応え、社会から信頼される専門職につながると思います。まずは目の前の患者に真摯に向き合うこと、そして「PTとして専門性を発揮できているのか」、常に自分と向き合う時間が大切かもしれません。
